



-光の性隷-

2013 COMIC MARKET85  
HITUJI-to-KITUNE PRESENTS  
SIDE:FINAL FANTASY XIV

DOJIN  
R18  
成人向け  
18歳未満の  
購入・閲覧禁止




蛮族・蛮神、難民、帝国……  
工オルゼアの抱える問題は多い。  
そして、そのどれもに関係する第四の問題が  
「人身売買」  
である

第七霊災から大分経つが、  
未だに行方不明になる者の数は年に数千人に及び  
その多くが、実験体や性奴隷になるために売られている。

その対象は、一般人・兵士・冒険者の区別なく、  
時には実力者ですら罠にかけられ  
売られていくという。





いま売り出されているのは、ダンジョンで昏倒させられた白魔道士のミコツテ。服を剥ぎ取られ肌をあらわされた状態で立たされ、その秘部を衆目に晒されている。

見てわかるとおり、性奴隷としての販売である。

運が良ければ死ぬまで面倒を見て

くれる飼い主に出会えるだろう

(ただし人としての尊厳は望めないが)

そして、運が悪ければ……

加虐趣味に買われ一週間も経たず手足のいずれかを失い、

一ヶ月頃には自ら歩行する事も出来ず、

半年後には棺桶におさまっているだろう。



競売参加者が一人一人、じつくりと彼女の秘部を広げ奥まで値踏みしていく。処女の商品は人気が高い為、誰もがじつくりと

広げ 撫で 匂いを嗅ぎ

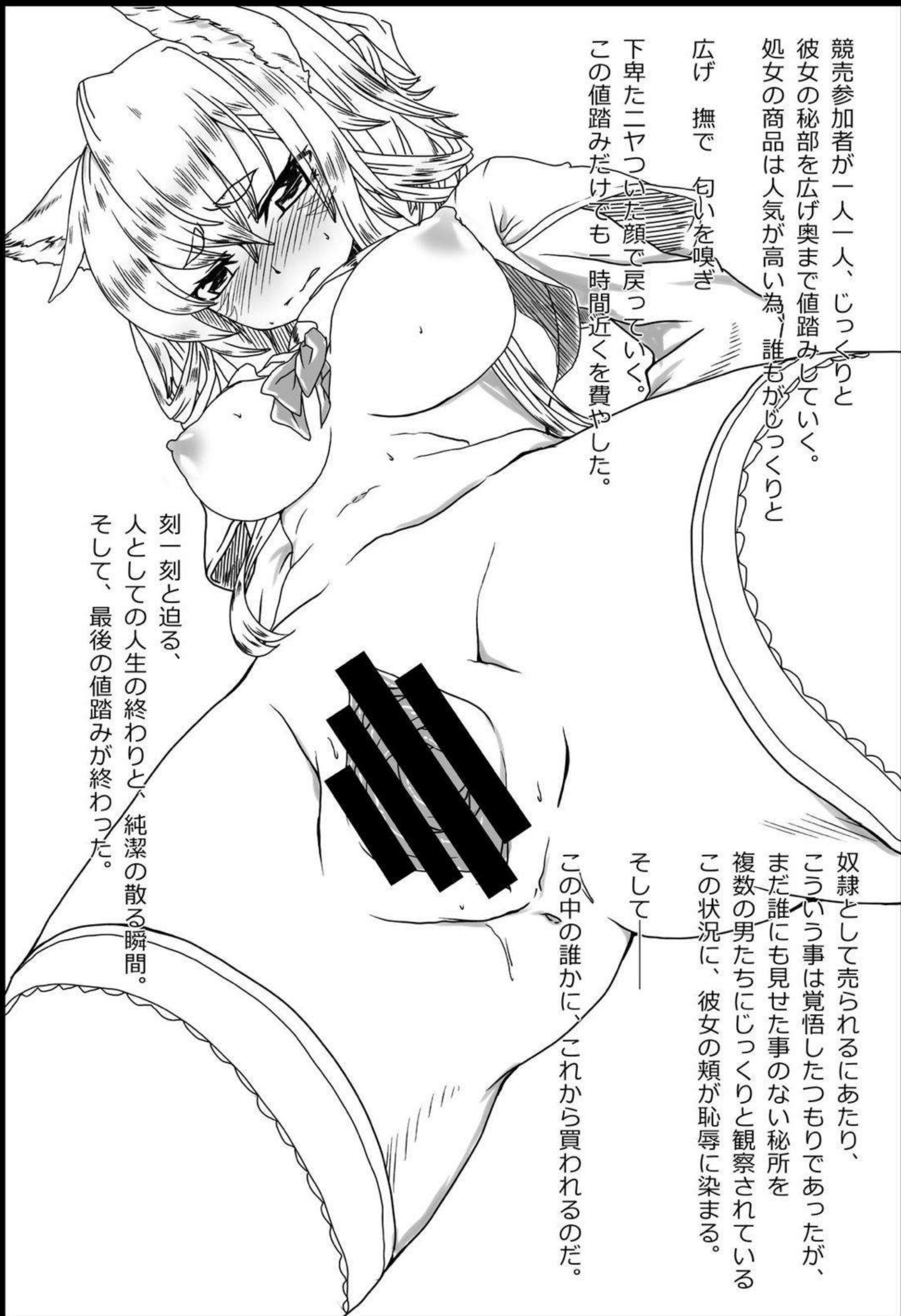
下卑たニヤついた顔で戻っていく。この値踏みだけでも一時間近くを費やした。

刻一刻と迫る、人としての人生の終わりへと純潔の散る瞬間。そして、最後の値踏みが終わった。

奴隷として売られるにあたり、こういう事は覚悟したつもりであったが、まだ誰にも見せた事のない秘所を複数の男たちにじつくりと観察されているこの状況に、彼女の頬が恥辱に染まる。

そして

この中の誰かに、これから買われるのだ。



彼女を落札したのは、同じ冒険者だった。  
ただし、解放してやる為に善意からの購入ではなく、

「買ったばかりのハウジングに置く奴隷が欲しかった」

という、この場においては特に珍しくもない  
人間として最低な理由からであった。

手始めにとお尻に大玉のアナルパールを挿し込まれる。  
当たり前だが濡れていない為、中々入らないそれを  
カブクで入れられ、痛みと異物感に悶える。

それを眺めてゲハゲハと下品に笑う男は、  
オマケとばかりに尿道へも器具を差し込む。

アナルとは比べ物にならない初めての違和感に、  
彼女は先ほどよりも激しく悶えた。

男の下品な笑いが、一層大きくなった。





アナルと尿道に異物を入れられたまま、  
男は彼女に口枷をはめ  
口での奉仕を要求した。

突然、喉奥にまで侵入してきた  
ソレに驚き、えづき、  
吐き出そうともがく。  
だが男は遠慮なく男根を喉へと叩き込み、  
彼女が窒息する寸前に、満足げに引き抜いた。

引き抜いた男根から彼女の口元へ、粘つく唾液が糸を引いた。

そんな事をした経験のない彼女は、  
たとえ経験があったとしても  
決してしたくないその行為を拒む。

が、男は構わず彼女の喉へと  
その怒張したモノを突き立てた。





ベッドへと引きずり込まれ、ついに奪われる処女。

前戯などロクに無く、ただ自分の欲望のままに突き入れ、腰を動かし、盛り上がったその様は、性交というより、彼女の肉穴を使った男の自慰行為のようにすら見える。

純潔を奪われた心の痛みと、破瓜による体の痛み。

その二つの痛みには彼女は、ただただシーツを握り締め一刻も早くこの行為が終わってしてくれる事だけを願い、男の自分勝手な抽挿に耐えた。





痛みに耐えるだけの彼女に、不意に男が何かを注射した。ほどなくして、彼女は自分の秘所から痛み以外の『何か』が湧き上がってくるのを感じた。男が打ったものは、その強力な中毒性から使用が禁止されている強力な興奮剤である。

先程までとは打って変わり、突如湧き上がる未知の感覚に戸惑いながらも、彼女の秘部はしっかりと愛液を分泌し始めていた。抽挿がスムーズになると、薬により敏感になった神経が性的快感を感じ取り、さらに多量の愛液を分泌する。

彼女のソコは、もはやつい先ほどまで処女だったとは思えない程の汁を滴らせ、激しく突き入れられる怒張に掻き出されシーツに大きな染みを描いている。






快感により男根を締め上げる肉穴のせいか、  
不意に彼女の中で男が精を放った。  
男は男根を深く突き入れて子宮口に亀口を密着させ、  
その白いゲル状の欲望を彼女の子宮と残らず注ぎ込んだ。

男のイチモチが引き抜かれると、彼女の穴は閉じることなく、  
ポツカリと口を開け、子袋に入りきらなかった白濁液を、  
ついさっきまではピッタリと閉じていた穴からダラリとこぼした。





純潔を奪われたあの日から、彼女は毎日何度も男に犯されていた。  
始めのうちには普通だったその性交も、回を追うごとに段々と過激になり、  
打たれる薬の量も日に日に増えていった。

彼女はこの日、両手を後ろに拘束されたまま、  
特大アナルパールで腸と尻穴を責められつつ  
まだ色も綺麗なその乳首にピアスを開けられていた。  
そこに打たれる、本日の本目にもなる薬。

その時、彼女のピンク色の蕾から白い液体が吹き出した。  
薬の常用によって乳腺が発達したのだ。





そして、ついに妊娠。


毎日何度も種付けされたので、当然のことである。  
この頃になるとすでに彼女の精神は均衡をたもてなくなっており、  
その手枷は外されて自由となつていく。

薬の強い中毒作用にやられ、今では逃げ出す事を思いつく  
ような思考すら残っていない。

一人の時は手や器具で自分を慰め、

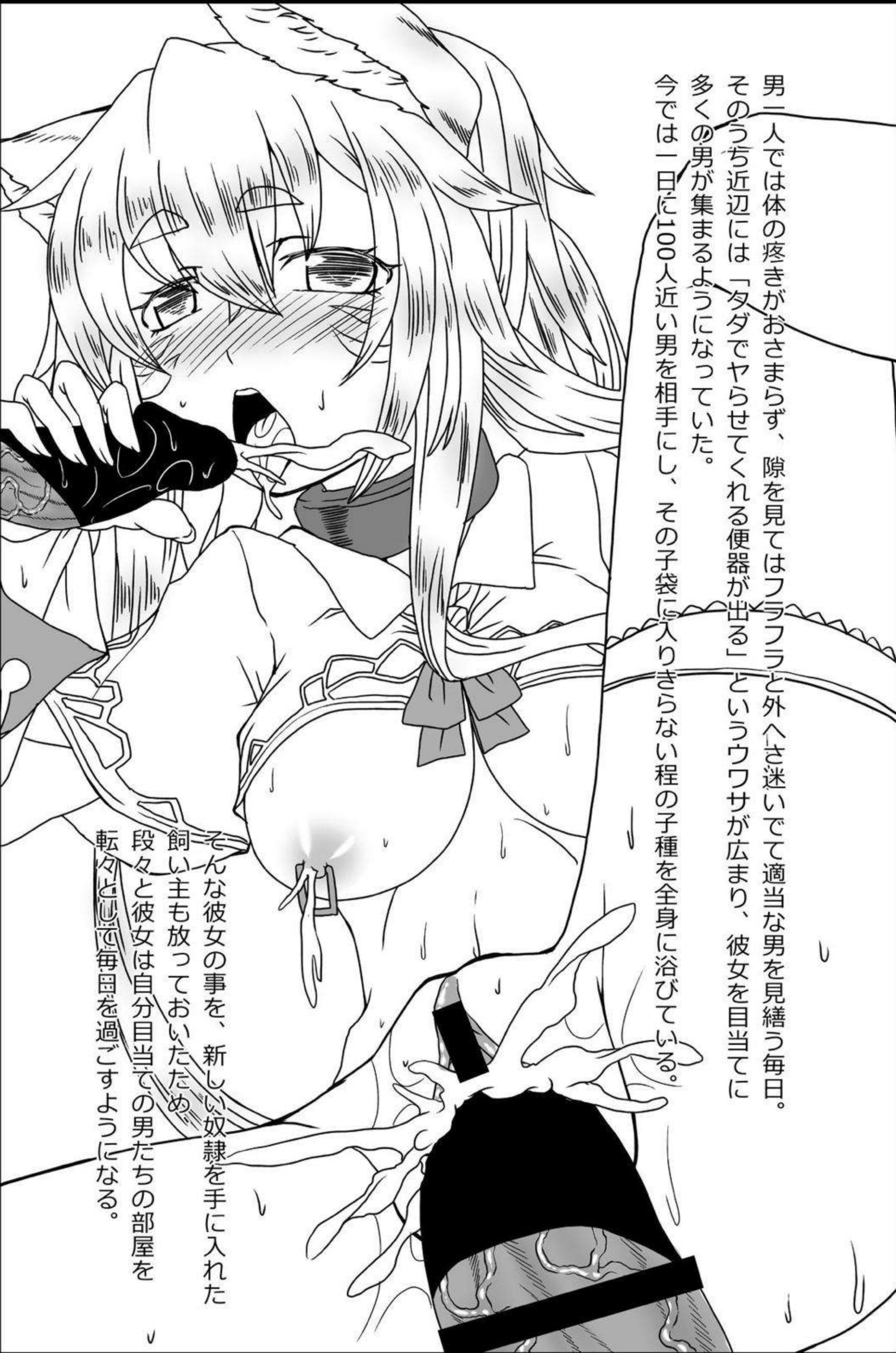
男が帰ってくればその濡れて開ききった穴を見せつけ、  
まさに発情した雌猫のごとく子種をねだるのだ。





性交のさなか、不意に訪れる陣痛。  
開ききった膣道は、苦もなく赤子を通過させ、  
薬により極限まで高まった神経は、赤子が子宮口を通り、  
産道を降りてくる過程ですら、耐え難い程の快樂へと変え、  
彼女のトロけた脳へと叩きつける。


産み落とした我が子を見やり、  
一瞬だけ母の顔が覗いたが、次の瞬間には元の  
発情した雌猫の顔へと戻り、  
その胎内から胎盤を引きずり出し空になった子宮へ、子種の注入を望む。  
彼女の理性はとうに失われ、あるのはただ快樂への強い欲求だけである。



男二人では体の疼きがおさまらず、隙を見てはフラフラと外へさ迷いでて適当な男を見繕う毎日。そのうち近辺には「夕ダでやらせてくれる便器が出る」というウワサが広まり、彼女を目当てに多くの男が集まるようになっていた。今では一日に100人近い男を相手にし、その子袋に入りきらない程の子種を全身に浴びている。

そんな彼女の事を、新しい奴隷を手に入れた飼い主も放っておいたため段々と彼女は自分目当ての男たちの部屋を転々として毎日を過ごすようになる。





日に日に汚れていく彼女の姿に、  
集まっていた男たちも段々と来なくなっていた。  
そしてついに誰にも見向きされなくなり、  
野良犬相手に力をつけていた彼女を拾ったのが、  
一人の錬金術師であった。

その錬金術師は、彼女の求め通り  
強い効果を持つ薬をタツプリと注いでやった。  
ただし、興奮以外にも効果のある薬である。

彼の研究の為に、多様なモンスターの卵を産む苗床が  
必要だったのだ。

その苗床になるのに必要な効能がタツプリと入った薬を、  
嬉しそうに注射される彼女。

多様なモンスタリーの遺伝子を内包した種汁を注ぎ込む、繁殖用の触手。  
それが今の彼女のパートナーである。  
その乳房からは母乳を絞られ、前と後ろの穴には常に太い触手が入り込み、  
排泄物の世話と種付けが絶えず行われている。

だがそんな状況でも彼女は幸せだった。  
常に快樂に溺れていられるのだ。

朝、意識が覚醒してから  
夜、イキ疲れて意識が落ちて眠りにつくまで  
ずっと、ずっと、快樂を貪っていられるのだ。  
蕩けた脳にある快樂欲求だけが今の彼女の全てなのだから。



響き渡る、嬌声と激しい水音。

今、彼女の胎内には育ち切った卵がいくつもおさまっている。

それを一つずつ、子宮から子宮口をくぐり、膣道を通り抜け、産みだしているのだ。

一つ産むたびに、狂いそうな快感が頭に突き刺さる。

その刺激に悶えているうちに、すぐに次が産まれ始める。

そんな快楽の連鎖地獄の中で、彼女は幸せそうな表情のまま、この先も卵を産み続ける。

いつかその子宮が壊れ卵を産めなくなるその日まで。





-光の性隷-

